



近所の人から「瀬戸さん」と呼ばれ親しまれている同院。取材した日も新生児室には多くの新生児がすやすやと眠っていた。最近では立ち会い分娩も増えているという

医療ジャーナリスト
伊藤集也が行く!
ニッポンの医療現場 第36回

少子化ニッポンの出産事情 産める体・産める環境 どちらも備えが大事

少子化といわれて久しい日本。いざ「子どもをつくろう」と思っても、地域の産科が激減し産む場所がどんどんなくなっているという事実を、多くの人は知らないのではないだろうか。理想の出産とは何か。昨今の日本の出産事情を取材した。

**高齢で出産する女性は
26年前の2.5倍**

厚生労働省の人口動態統計（2011年）によると、昨年1年間に生まれた子どもの数は約105万人。26年前に比べて38万人、前年よりも2万人あまり少ない。同時に妊婦の高齢化も進む。35歳以上で子どもを産む女性の数は、1985年には10万人ほどだったが、昨年はその約2.5倍だった。出産年齢が高くなる理由は、経済的な理由や仕事の問題、結婚が遅いなどさまざまだが、最近の傾向について、産婦人科医の瀬戸裕医師（瀬戸病院院長）は、こんなことを話す。

「最近では、40歳前後になっても子どもが産める」と思っている女性が増えています。妊娠や出産に対する認識の甘さを感じます。これには、昨今の報道の影響が大きいという。

「生物学的にみると、人間の理想的な妊娠・出産は22〜23歳くらいから、35歳くらいまでです。しかし、40代で第一子を出産したという報道を見聞きしていると、



地域の産科を守る病院長の瀬戸医師

院。併設のスタジオで聞くマタニティヨガやマタニティピクニックを通じて、妊婦同士のコミュニケーションの輪を広げている。ほかにも出産後に仕事に戻る女性のために、病児保育・病後児保育（病児や病後の回復期の子どもを預かること）も実施している。需要は多く、利用者は年々、増えているという。

本来ならこうしたことは行政が取り組むべきことだが、それが十分でないため、その役割を個人病院が負わざるをえない状況になっている。あらゆる点でこの国の未来を創る子どもたちへの投資を怠っている現在の政治状況。選挙の票になる高齢者の医療・介護などは充実してきたが、この国はもっと子どもを産み育てる環境に配慮すべきだ。



同院では医療情報も自宅PCや携帯電話で確認できる「どこでもMY病院」を試験運用中

自分もそれくらいで産めると思ってしまうのです」

もちろん、リスクを伴うことを夫婦で受け入れた上であれば、ある程度、年齢が高くなったときの妊娠・出産も悪くない。いろんな人生経験を積んだからこそ、それを育児に生かせる部分も大きい。

瀬戸医師は、そういうことよりもむしろ、女性が子どもを産むということに対して正しい知識を持ち得ていないことが一番の問題と指摘する。

「例えば、若い女性に、1周期あたりの妊娠しやすさは20〜30%で、30歳を超えると1年に3〜5%ずつ低下していく」と説明すると、ほとんどの方が驚かれます。

そういうことは、本来なら学校で教育すべきことなのではないかと、それが今の日本ではできていません」

妊娠・出産の知識を得ることはまた、自分の体を知ることでもある。例えば、子宮内膜症や子宮筋腫などは女性ホルモンに依存する病気で、年々重症化していく。それが結果的に不妊の原因につながることも少なくない。

今はまだ子どもを考えていない女性でも、本来なら婦人科検診を定期的に受け、病気があったらほうっておかず、必要に応じて治療やケアを受けることが大切なのは言うまでもない。

日本は産み育てやすい環境になっていない

今の日本は子どもを産み育てやすい環境になっていないのかといえは、決してそうではない。これがネックとなつて、子づ

くりを先送りしている夫婦も多いのではないだろうか。今回取材した瀬戸病院がある埼玉県所沢市は、東京のベッドタウンとして年々人口が増加している。年間分娩数は約2700件だが、この半数に近い1200〜1300件ほどの分娩を瀬戸病院が行っている。

瀬戸医師によると、以前は所沢市内やその周辺にも産科がたくさんあったが、少子化の影響などで閉院する産科が続出した。今は瀬戸病院のほか、大学病院や公立病院など、数カ所の医療機関で行われているのみだという。

他にもれず、この地域にも妊婦の高齢化が生じている。今年の瀬戸病院の出産率は約27%。5年前と比較して6%あまり増加している。出産のリスクを伴う妊婦の増加で、緊急時の対応を重視するようになった同院。常勤する医師数は12名だが、産婦人科医だけでなく、麻酔科医や小児科医もいて、昼夜、何かあったときに素早い対応ができるようにしている。

「そうしないと、24時間、365日、妊婦を守れない」

と瀬戸医師はいう。お産は女性にとってのも夫婦にとっても一大イベントであるがゆえに、アメニティ重視のブランド病院を選ぶ傾向がまだまだ残っている。しかし、子どもを産むというには、多かれ少なかれリスクが伴い、お産が急変することは少なくない。万が一のときに対応可能な、安心して出産できる産科を選ぶことのほうが重要ではないだろうか。

さらに産婦人科医の立場から、瀬戸医師は「産んでからのことも考えてほしい」と話す。とくに危惧するのは、母と子の孤立だ。「昨今は核家族が増え、相談できる親が近くにいないケースが増えています。また、妊婦の年齢もバラバラなので、話し合いにくい。だからこそ、孤立させないための場、コミュニケーションをとれるような場が必要です」（瀬戸医師）

同院では、駅前に分院である西所沢クリニックを開